

講演会・シンポジウム報告

グローバル言語教育研究センター (RCGLE)

2018 年度連続講演会

日本語教育における『学びのユニバーサルデザイン』を考える

第一回講演会・ワークショップ

読み書きの困難な子どもに対するワーキングメモリ理論からの支援

日時：2018 年 7 月 7 日 (土) 10:00-12:00 講演 13:00-15:30 ワークショップ

場所：国際基督教大学本館 1 階 152 教室 参加人数：約 40 名

講師：湯澤正通氏 広島大学大学院教授

ワーキングメモリは「脳の黒板」に喩えられます。「脳の黒板」が小さいと一度に覚えて置ける情報が少なく、学習に遅れが生じます。特に音声の情報に関するワーキングメモリが小さいと、読み書きに困難を生じます。そのような子どもをどのように支援したらよいのでしょうか。ワーキングメモリの基本的な考えを説明し、それを踏まえた子どもの支援方法を解説します。

本講演では、ワーキングメモリの定義、発達、ワーキングメモリと読み書き困難との関連、ワーキングメモリ理論に基づいた学習支援方略について解説があった。

まず、ワーキングメモリは知識を学習し長期記憶へと蓄える入口となっていることから、ワーキングメモリに問題があると注意のシフトや抑制が働かず、学校での学習が困難となることが説明された。ワーキングメモリは年齢とともに発達していくが、大人との情動的な結びつきにより、発達が促される話があり、教員として、学習者が自らのワーキングメモリを十分に活用できるよう教育環境を調整・工夫し、成功体験の蓄積を支援する重要性を再認識した。また、読み書き困難にはワーキングメモリの弱さが考えられるが、それ以外に発達特性や自信低下等の二次障害も考えられるため、多様な側面から読み書きの弱さを特定することが必要であることに触れられた。最後に、情報を整理し最適化することで、記憶をサポートする方略を活用させたり、学習者自身が注意をコントロールしやすい環境を作ったりする支援が、すべての学習者にとって学びやすい「授業のユニバーサルデザイン」につながることを示され、実践的な内容であった。

ワークショップでは、実際の事例をもとに、支援方略の検討がグループで行われた。小グループで具体的な事例についてディスカッションをすることで、困難を抱える学習者のアセスメントについて理解を深めることができた。学外参加者は大学、インターナショナルスクール、塾など、多様な教育機関に所属しており、普段異なる教育機関で働く方々と意見を交換する貴重な機会となった。

子どもの読み書きにおけるワーキングメモリと学習の問題、その支援方略を学ぶことで、留学直後で環境が大きく変わり、ワーキングメモリに負荷がかかる状況で外国語を学ぶ大学生の難しさとその支援について考えることができた講演、ワークショップであった。

(文責：武田知子)

日本語教育における『学びのユニバーサルデザイン』を考える

第二回講演会

ディスレクシア - 現場の教師に求められる知識と態度 -

日時：2019 年 3 月 6 日 (水) 13:00-15:00

場所：国際基督教大学ダイアログハウス 2 階 国際会議場 参加人数：56 名

講師：池田伸子氏 立教大学 副総長 (国際化推進担当)

学習者の多様化に伴い、認知的な特性から日本語学習に困難を抱える学習者も増えています。本講演では、日本語の読み書きにおける困難さはどのような形で現れるのか、教員としてどのように学習を支援すべきか、そのためには何を知っておくべきかについて、日本語教育における読み書き障害支援をテーマに研究を進めていらっしゃる池田伸子先生にお話をいただきます。

講演では、ディスレクシアとはどのような症状か、教員としてどのように判断し支援を始めるとよいのか、どのような支援が可能かについてのお話をいただいた。

まず、ディスレクシアの症状について、「読むときの流暢さの欠如」、「飛ばし読み」、「鏡像文字を書く」、「見たばかりの字形が想起できない」など、14 の特徴があることが説明された。日本ではディスレクシアを診断する標準化された基準がなく、さらに、日本語教育の現場で応用可能な診断基準はないため、申告や診断があるかないかにかかわらず、先に挙げた 14 の特徴があり、読み書きに困難が見られる場合、現場の教師としてできることから始めようという提案がなされた。また、困難を抱える学習者の支援を積み重ねること、その経験を他者と共有し支援の基礎を作っていくことの重要性が指摘された。

次に、すぐに現場でできる支援として、「読みやすい字で、十分な行間、間隔をとる」、「整理された内容を書く」など板書の工夫が紹介された。可能であれば、パソコンや OHC、OHP などの機器の使用も困難緩和に役立つということであった。また、配布物のフォントは、12 から 14 ポイントと大きめのサイズで、ゴシック体など太くて読みやすいものとし、漢字のルビを下にふるなどの工夫が提示された。さらに、教室活動の配慮として、音読を避ける、読み書きの困難を軽減するために事前に資料を渡しておく、読み上げソフトなどのツールが使えるようデジタル媒体で配布する、様々な支援デバイスを紹介するといった支援などについて解説があった。学習者自身が学習に参加しやすくなるよう、マス目のあるノート、芯の柔らかい B や 2B の鉛筆の使用を勧めたり、授業の録音や板書の撮影を許可したりするなどの配慮についても触れられた。

取り組みの姿勢として、全ての学習者の母語や日本語レベル、困難度が異なるため万全な支援法というものはないが、教師が情報を集め試行錯誤を続けることが大切であるというお話があった。そのためのリソースも多く提示され、具体的な情報を得ることができた。最後に大切なこととして、「ディスレクシアだけでなく、学習者の多様性を理解し、学習者に寄り添い、ポジティブに支援できる教員の育成が重要」との言葉があった。日本語教育における多様な学習者への支援の重要性を再確認した講演であった。

(文責：武田知子)